

滋賀の出版文化情報誌

デュエット

Duet

2012 秋 | vol.107

座談会

江若鉄道の思い出

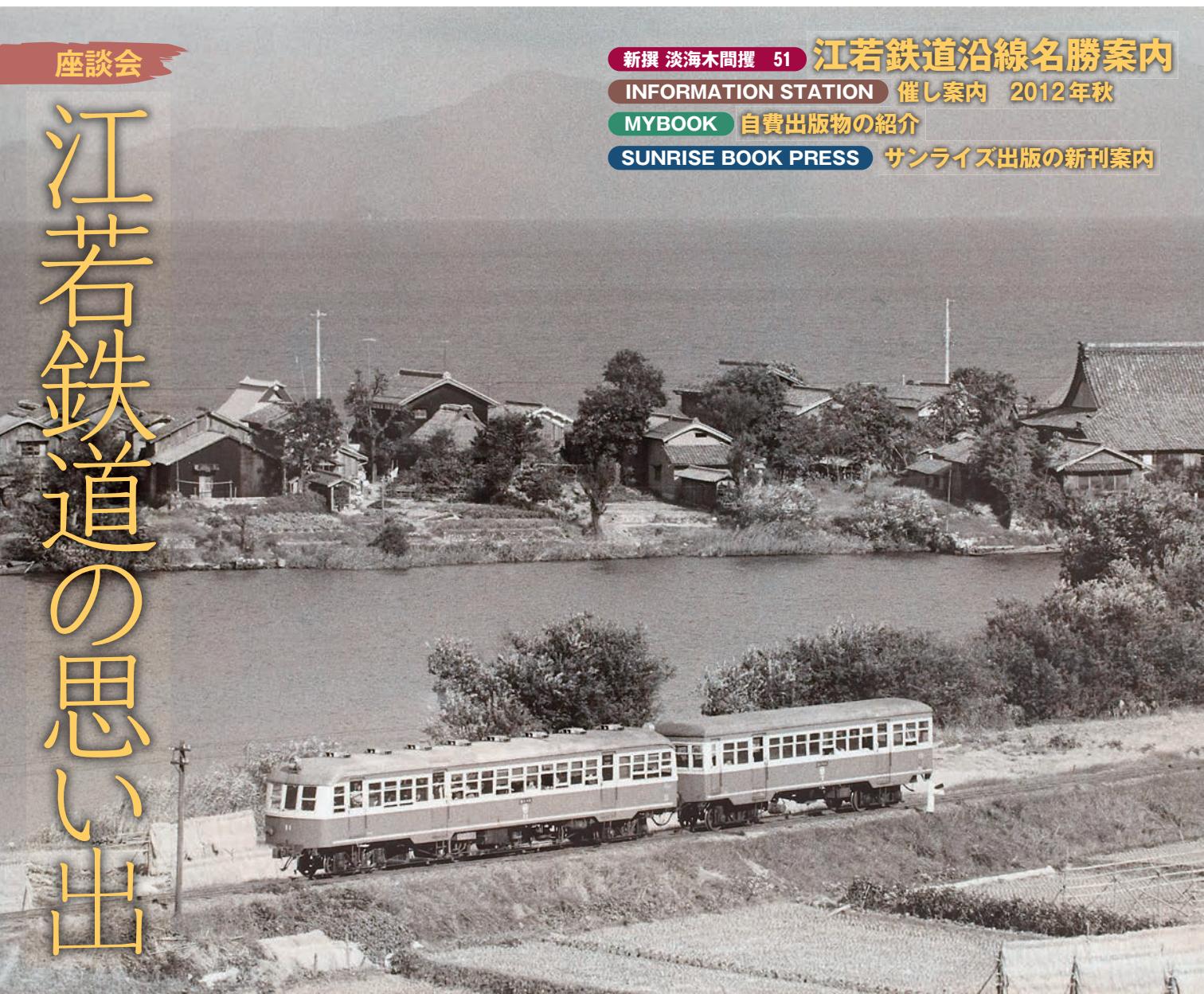
新撰 淡海木間撰 51

江若鉄道沿線名勝案内

INFORMATION STATION 催し案内 2012年秋

MYBOOK 自費出版物の紹介

SUNRISE BOOK PRESS サンライズ出版の新刊案内





↑江若鉄道 白鬚駅 (昭和44年 福田静二氏撮影)

江若鉄道の思い出

座談会

浜大津—今津間51kmを約1時間半で結んでいた江若鉄道が廃線となったのは、昭和44年(1969)11月1日。40年余りを経た現在も、のどかな琵琶湖岸を走った蒸気機関車やディーゼル車を懐かしむ声絶えません。20～30歳代の頃にその運行を支えた江若鉄道OBの皆さんにお集まりいただき、当時のようすを振り返っていただきました。

↓座談会にご出席いただいた江若鉄道OB
前列右から、伊庭善治さん、河合富士雄さん、村上勝美さん、後列右から、松本章一さん、上田正直さん、司会進行を務めた大津市歴史博物館の木津勝学芸員



▽(司会進行) 本日はお集まりいただきありがとうございます。順に当時のお仕事の内容の説明をお願いできますか。



松本章一さん
1940年生まれ(72歳)
[車両課・機関士]

日行って1日明け、また2日行って1日明け、公休という勤務で、浜大津や三井寺下などの大きな駅は、1日行って1日明けの隔日出勤でした。仕事は、便所掃除から始まり、切符のパンチ入れ、改札を下りてきた人の集札、荷物係、出札という順番で覚えていきます。いろいろ慣れてくると、次は助役と駅手2人だけの小さな駅へ配置されました。

松本 比叡山高校を卒業して、昭和34年4月に江若鉄道の車両課に入社しました。当初は機関区の雑役から始まり、1年半ほどして慣れると、夜に助役、検車係、私の3人で三井寺下機関区を守る24時間勤務の仕事につきましました。最終列車が着くと点検して、朝一番の列車がスムーズに出庫できるようにする、冬であればエンジンの凍結を防ぐために一晩エンジンをかけて守をする、大変厳しい仕事で、一時は転職を考えたくらいでした。

それからボイラーの試験に受かって2年ほど機関助手をし、次は機関士の試験を受けることになったわけですが、運転理論というのは本当に難しく、機関区長さんにつきっきりで教えていただきました。何とか合格して、晴れて機関士になりました。



上田正直さん
1934年生まれ(77歳)
[車両課、自動車課、事務所]

伊庭 駅長、助役、出札、貨物、それから車掌、それと駅手、5〜6人だったと思います。堅田駅はちょっと特殊で、私の入った時は、前にバスの車庫があり、バスの車掌も堅田駅長が管理していました。

上田 瀬田工の機械科を昭和28年に卒業し、就職先を1年で辞めてぼおっとしているときに友達に誘われて入社しました。三井寺の機関区で、10年あまり整備をやっていたんです。その時分、車両が20ぐらいだったか。松本 22ありました。

伊庭 蒸気機関車もありましたね。

上田 蒸気機関車にはC11、C12があった。ディーゼルエンジンの機関車はDD、DCというのがあった。整備の関係は、ディーゼル自動車を整備するグループ、蒸気機関車を整備するグループ、それらの車輪など足元関係を整備するグループと、三つに分

↓三井寺下機関区(松本章一氏蔵)



かれています。8〜10人でディーゼルエンジンの整備、変速機などを含めた整備をしていました。いまみたいな機械がないので、みな人力です。整備士が腕の力で、ごつい枕みたいなものを使って、はねたり閉じたりしながら転がすんです。

1カ月検査というと、ナットがゆるんでいないかとか、ちよつとふたを開けて検査する。3カ月検査も同じような検査。6カ月検査では、変速機とかを分解してみる。1年検査ではエンジンもみんな分解して整備する。エンジンを分解すると手も爪の真ん中まで真っ黒けになってしまふんです。あれが一番、若い者はみんな困っていたな。

伊庭 みんなで帰りしなに風呂に入ったな。

上田 そう。風呂に入っても落ちない。

伊庭 毎日点検は、1行程走ってくると点検ハンマーで車輪やらを全部トントンとたたいて、ネジのゆるみがないかとかを点検されていましたね。

上田 それは出周り検査といって毎日やり



伊庭善治さん
1938年生まれ(74歳)
[運輸課・操車並車掌]

伊庭 入社したのは昭和30年ごろです。運輸課で、まず堅田駅へ配置されました。2

ました。乗務員が調子が悪いと報告がある
と、徹底的に整備したり。

三井寺機関区の整備にあたる者は国家試験の免許を受けました。すると、人のたりなかつた自動車課に呼ばれて、江若交通で4年ほど整備をやりました。そして、早期退職が求められたなかで、江若交通でがんばろうかという社員が国家試験を受けて自動車課へドツと入ってきた。同時に、46歳以上の人が強制定年でやめられたんです。用地管理にいたベテランの人もやめてしまった。「機械の図面と土地の図面とは違うけど、図面が見られるから用地管理に来い」というので事務所に上がって、さっぱりわからないまま用地管理の仕事につきました。

当時、江若の用地には20m刻みで杭が打っており、それを目印に管理するのですが、私が担当した時期の仕事は、江若がなくなり湖西線になったときの残地をどうするかでした。駅の敷地以外にも、湖西線は直線が多いのに、江若は回っていたから残地ができるんです。それを元の地主さんに個別に売ってしまうとあとで利用できないから、県や大津市、堅田町、高島町などの自治体で道路用地として買ってもらうことになっていきました。来月は収入がなく給料が払えないというような時は、役所もよくわかっていて、「今月は、とりあえずこれだけ買おうか」と協力してくれました。



河合富士雄さん

1927年生まれ (85歳)

【機関士】

▽次の河合さんが戦中の入社で、今日の申

では最古参ですね。

河合 僕は他で勤めていたんですが、機関区の助役をしていた叔父に人がいないから来てくれというので、昭和19年3月に入社しました。まず、構内手でした。仕事は機関車の掃除や、戦時中で木炭車が多くなっていたので、ガソリン車を改造した木炭車に炭をつめる仕事です。夜は機関車の火を消さないように、3、4台の守をするんです。普通の機関車なら朝まで大丈夫ですけど、パッキンも何もないので蒸気が漏れて水がだんだん減ってくる。それをまた上げて、注水器でボイラーに湯を入れる。その作業で寝ている間がほとんどありませんでした。それを3年ほどやっていました。

すると今度は機関助手がたらなくなってきた、構内手のまま窯焚きをしました。それを3年間やって、24歳のときに機関士になりました。それから40歳ぐらいまで機関士だったことになります。昭和42年に検車課に変わって乗務はなくなり、まもなく廃線を迎えたんです。

まず、機関助手の時代は、とにかく石炭の質が悪くて苦労しました。亜炭あたんで蒸気を上げるのは本当に大変です。後の方になるとちよつとの間でしが割木かきもあって。蒸気が上がらなければ、ボイラーの中を風が通らず余計に燃えない。5時間かかったことがあります。8600という機関車でも、普通なら半分の量でいけるのに、質が悪いからいっぱい石炭積んで。まだ22、23歳だったけど、帰ってきたらもう腕が上がらん。伊庭 戦中の話だから燃料がないんです。石炭が全部軍隊へ行ってしまから。

河合 戦後は蒸気機関車がだんだん減っていきましたが、僕が24歳で機関士になって一番楽しかったのは、Cの11の機関車を運転していたときの気持ちよさ。

※1 堅田町 滋賀郡に属していた町。昭和42年(1967)に大津市に編入。

※2 亜炭 水分などを多く含んだ炭化の程度が低い石炭で、発熱量が小さく、灰を多く残す。

伊庭 大きい機関車でしたね。

河合 あれで走ったらものすごく気持ちがいい。かっこいいので、女性にもよくもてるんです。あれはよろしいな(笑)。そうすると、今度は小さい6号の機関車で苦労するんです。話が前後するけど、木炭車は力が弱いから勢いをつけないと坂が登らない。また電気関係も悪いから、セルモーターが駄目になったら、お客さんに押ししてもらってエンジンを掛ける。

▽お客さんに押しもらったというのは、昭和のいつぐらいまでの話なんですか。

上田 僕らの時代、昭和30年ぐらいには、もうそういうことはなかった。ディーゼルエンジン、それも国鉄と同じものを使っていたから性能はよくなっていました。

▽最後に唯一の女性である村上さん。



村上勝美さん

1939年生まれ (73歳)

【総務課】

村上 私の祖父は、大正6年ごろですか、線路をつくる現場の監督を務めたこともあり、父も江若鉄道に勤めていました。祖父が写っている当時の写真を、入社してから部長に見せたら、「ああ、わしも怒られながらしていた」と言われたこともあります。私は本社の総務、庶務課について、タイプ資格を取っていたのでタイピストが主でした。それと、本社の電話番、電話は私の前にあり、正面が総務課長の席でした。そ

のときは女性一人だったんですけど、私はおてんばで、そんなに動じないでやっていました。当時は運輸大臣などに発送する文

混雑した夏の水泳と冬のスキー



司会進行
木津 勝さん
大津市歴史博物館学芸員

▽夏は琵琶湖への水泳客で混雑したそうですが。

河合 7月の第4と8月の第1日曜は一番お客が多いときでした。機関車の前も横もみんなぶら下がって。混合列車といって、客車が後ろだったかな、客車と貨車をつなげたものは、とにかく長いから客車をホームにつけるのが難しかった。

上田 夏のダイヤは、近江舞子^{おひまいこ}辺りでお客

章のタイプ打ちをすべて任せました。極秘の書類というのもあって、それは会社が終わってから打っていました。

さんに乗せる客車がないから、貨物の後ろに客車をつないでいたという話は聞いた。伊庭 三井寺から浜大津の間は警察がいるから、あそこは乗せ替えて行つたとか。上田 そういう時代でしたね。伊庭 自連(自動連結器)の上まで人が乗っていましたもんね。

上田 いけないということとはわかっていたんですけども、当たり前になつていった。松本 お客さんも楽しみなんです。ぶら下がったりしてスリルを味わうとかね。昭和30年代以降もありました。ただ、貨物に乗せてということはなかったけど。村上 昭和35、36年は、汽車で舞子、和邇^{わゐ}、真野^{まの}浜の水泳場に、鈴なりにぶら下がってでも乗っていましたよ。上田 事故はなかったな。振り落とされてというのは聞きませんでしたね。

伊庭 聞かなかつたね。▽水泳列車というのは、だいたい下りるのは近江舞子が多いんですか。松本 当時はそうでした。伊庭 もつと向こうへ行く和白鬚^{しろげ}がある。村上 青柳^{あおやなぎ}浜も。水がきれいだった。

上田 その時、三井寺の車庫は空っぽになるから、われわれ若い整備士は浜大津へ行かされました。ちょうど無蓋車の貨車が踏切の辺に止まるので、そこで下りて京阪電鉄の方へ行ってしまふ、つまりただ乗りするお客が出てくる。その切符取りです。持っていたはしごを掛けて降りられるようにしたその下でお客から切符をもらう。持っていない人なら、どこどこからだった

らいくらですと教えて。たいがいの方は正直に乗った駅を言っていたんでしょね。▽以前、江若の方にお聞きしたのは、気動車を複数つなぐ場合、車両ごとに全部運転士がいて、警笛で合図をしながら発車したそうですが。

松本 いや、ブザーがあるわけです。変速機だったから、スタートのときは1段で、ブウ。そして今度、変速機を変えるときに、またブウと鳴ると、次は2段に入れる。それで3段に入れる。ブウ、ブウ。それでした。河合 うん。

伊庭 それが、1両ずつつないであるのを重連、3台続くとときには三重連というんです。後から1人でできるように、2両編成になったやつができたんですね。

松本 そう。それが総括。伊庭 そのときは機関士1人。あれは具合がよかつた。

▽重連や三重連にしたのは、基本、水泳シーズンだけですか。

上田 いや、そうじゃない。通勤のときも。伊庭 お客さんの多いときですね。列車の回数はだいたい決まっています、その回数の中に人を運ばないといかんから、1両でたんならなかつたら2両つなぐ、エンジンのない小さな付随車の場合もあったけど、それではたらないときは、大きな普通の車両を連結した。

▽今日は混んでいるから急に増やすとかいう臨時列車もあつたんですか。

松本 浜大津から連絡があるんです。いっぱい人がいるから、とにかく列車を出してくれということ。

上田 団体さんもあるしね。

伊庭 うん。普通1両のところを2両にするとか。新しい時間帯には走らないけど、



↑江若鉄道 水泳列車(昭和43年8月 福田静二氏撮影)

車両が増えるんですよね。

▽本数も増える。

伊庭 本数が増えるということはあんまりない。よっぽどのときしかない。

松本 そうじゃないと危ないんです。単線運転だから。

伊庭 タブレット方式だから1区間に1個しか出ないしね。

▽あと、お忙しい時期はスキーだと思うんですが、スキーはだいたい比良山……。

伊庭 比良山よりマキノですね。

松本 あの時はサンケイバレイ（現、びわ湖バレイ）があったから。サンケイバレイが多かったな。

上田 あれは後の方でしょ。

▽そうですね。できたのが昭和40年です。

伊庭 小学校のスキー教室はマキノですね。上田 スキーは、やっぱり比良が一番多かったんでしょうな。江若を利用する人は、

マキノのお客さんは小学生が多かったから、今津で下りて、またバスで連れていくのは

先生がなかなかわんから、出発地からバスに乗るようになった。

松本 水泳客はたくさん乗れても、スキー客はたくさん乗れなかったからね。持っているものが多いから。

村上 スキー服が全然ない時代だから、すぐぬれてね、そんな時代でしたね。

伊庭 雪は結構あったな。

河合 列車から、こう、両脇の川に浮かんでいる雪がつかめた。

上田 列車は今津の駅に入るんだけど、雪で列車が止まったことはあまりない。雪がよけるから。

河合 だけど、ダイヤはめちゃくちゃでした。だいたい安曇川から北が、よう積もった。

▽ラッセル車はなかつたんですか。

松本 そういう砕くやつはないんですけど。

上田 さあつと分けていきよるんです。

伊庭 横へかき分けて行くんですね。

松本 行ったり来たり、夜中に何回も走るわけです。

河合 除雪車が面白い。朝一番は一面真っ白で、走ったらすごく気持ちがいい。景色のいいこと。写真に撮りたかった。

松本 あれは楽しみでしたな。男冥利につきるといふかね。

伊庭 あれが通った後、ポイントに雪がはさまったら取れないんですよ。あれを取らんことには線路が変えられないし。

上田 整備からしたら、雪の降った後に故

▽当時、この旗を使っておられましたか。

伊庭 赤と緑のこれは操車が持つ旗です。僕らはこれをきりきりと巻いて、背中のパンドにくつと挿して歩いた。「連結」(①)はこう。「突放」(②)はこれですね。

▽突放というのは。

伊庭 突き放すんです。機関士が後ろから押さえていって自連だけぱつと切ると、離す

貨車だけが向こうへ飛んでいくんですわ。貨車は駅手に乗ってサイドブレーキをかけて停車させる。そして、これは行け、去れ。

「向こうへ行け」(③)です。これを振ると、「こっちへ来い」(④)。赤を横に持って、

こうするのは、「ぼつぼつ来い」(⑤)です。停車位置に近づいたらあんまりどんどん来てもらったらいかんから、赤を上を持って、

やるわけです。そして「ストップ」(⑥)と。

松本 旗を使うのは昼間ですね。

伊庭 晩はカンテラを使います。

操車用の赤と緑の旗の使い方

①連結



②突放



③向こうへ行け(去れ)



④こっちへ来い



⑤ぼつぼつ来い



⑥止まれ(ストップ)



→DD1352による除雪運転(松本章一氏蔵)



貨物では材木と米が北から南へ

▽当時運ばれていた貨物は、どういうものが多かったんですか。

伊庭 材木とか。米は北から出てくるやつですね。石炭やらも来たね。

上田 米は江若沿線から都会へ出て行くんです。京都、大阪神へ。今津までは国鉄と：伊庭 トラックや何か、荷車で来るのと違うかな。

▽材木はどこから乗るのが多かったんですか。安曇川などですか。

上田 やっぱりあの辺が多いんでしょうね。山深いから。それを置いておく広い場所があったし。学校のグラウンドみたいな。

村上 和邇わに駅も材木が多かったですね。

伊庭 だいたい駅のそばには材木屋さんがありますね。

伊庭 浜大津にもけっこう材木が置いてあったね。

上田 駅から倉庫へ下ろすと、丸通まるどお（日本通運）。

伊庭 丸通にはベルトコンベヤーみたいなものがあるって、下ろしたら、カラカラと転がっていく。駅には、丸通の事務所もあるし倉庫もあった。農協の倉庫もあったな。

上田 そう。農協は江若の用地を利用した倉庫があった。



↑貨物の輸送（昭和44年 福田静二氏撮影）

▽利用者の方とのエピソードで何か覚えておられることはありますか。

河合 よく終列車で、顔を知っている人だったら「起こしてくれ」って頼まれたな。それはまだましで、ぐてぐてに酔って抱きかかえて下ろすようなのが一番困った。

村上 そのころは、どのお客さんがどこで下りられるか、ほとんど知っていたものね。だから、「起きや、起きや」って。

上田 地元の人と江若の駅員というのか、職員とは顔見知りが多かったからね。

伊庭 雪が降ってくるって、家から駅までは長靴などを履いてきて、駅で靴に履き替えて行かれるんですね。長靴は駅で預かっている。預かるというか置いておくだけ。

▽当時、一番乗降が多かったのは浜大津駅ですか。

伊庭 やっぱり浜大津でしょうね。

上田 ずっと寄せてきて、あそこへ下ろすんですから。

伊庭 堅田もそこそこあったのと違うかな。あそこからバスが伊香立いのかたちや仰木おのぎやらに出ていたからね。そういうバスの起点になるところ、高島に安曇川はそこそこあったはず。

村上 駅前におうどん屋さんが必要ありません。たくさん入っていましたよ。

伊庭 昔は浜大津でも江若鉄道が1時間に1本、和邇までは30分に1本ぐらい、それかなりの人が駅にたまるから、駅の周辺

運転手は花形、けれど気苦労も多い

▽やはり、運転士さんというのは花形の職業だったんですか。

上田 花形ですよ、鉄道では最高の花形。

松本 女学生によくもてましたね。声を掛けられるというか、こちらが乗る時間帯を

↓江若鉄道 浜大津駅構内（昭和44年 福田静二氏撮影）



にはうどん屋さんとかがたくさんありました。昔は大津駅から浜大津まで歩かれたから、あの近辺は店が割に栄えていました。

村上 浜大津の売店も、卵を煮ぬぎしたものが冬の間、よく売れましたね。たくさんあるなと思ったら、もうないという。

伊庭 冬になると牛乳を温めたりして、よく売っていましたね。

▽駅に売店があったのは浜大津だけですか。

伊庭 割にありましたよ。三井寺もあったけど……。

村上 木戸きど駅にも売店がありましたよ。

調べておいて、「今日は1時間早引けして帰ってきた」とか言われて、そういうことがあったね。

村上 私も見覚えがあるのは、若い女の子で襪ひだスカートをはいた子が、必ず1回後ろ



↑10月31日営業運転最終日の近江今津駅。駅員さんとともに高校生が記念撮影をするようす（昭和44年 福田静二氏撮影）

気安だった地元の人と駅との関係

の背中に立たれましたわ。ずっとそこに立っているわけではないけど、2、3人の女の子はいつもそうしていました。

河合 僕でもよく話し掛けられました。普段あんまり話さんほうでしょう。運転しているときにべらべらしゃべりに来られて嫌でした。

村上 あのころは機関車の運転士の後ろのところにもちよつと立っていた女子学生は多かったですよ。いまの女性とはまた違う意味があると思うんですけど。

伊庭 あの時はみんな純情というか。村上 淡い憧れですね。

松本 機関士もよいことばかりではないですよ。江若在籍11年で、そのうち機関士は

わずか5年半ですけれどね。いまだに、出勤を遅れる夢、ブレーキのきかない夢、信号無視をする夢を見ますね。それを同じ機関士仲間と言うと、「おまえもやつぱりそうか」「楽しかった夢は見いひんな」と返ってくる。一番多いのはブレーキのきかん夢ですね。人の命を預かっているという意識がすり込まれてるから。

上田 それは職業病ですね。

松本 のんびりした思い出としては、こういうことがありましたわ。お年寄りが線路伝いにこちらへ向いて手を振っている。「待ってくれ」という意味らしい。けれども、発車の時間で車掌が笛を持って、ピピピと吹いている。そこで点検ハンマーを持って下へ降りて、車掌に「ちよつと調子が悪いから点検します」といって時間稼ぎをして、その人が乗られてから黙ってさっと動いた。いまのように、15分間隔で来るんだつたら待てないけど、昼は1時間に1本なので。まあ、若い、それも男だったら待たなかつ

たでしょうが（笑）。

伊庭 いまから思えば、いい時代だった。

上田 いい時代でした。

伊庭 のんびりして。

村上 江若社員はいい人が多かったんですよ。それは感じるわ。

伊庭 だいたい、江若社員は兼業農家が多かったから、みんな融和な性格ができてたんですよ。食べることに苦労してないからね。

村上 そうそう。

上田 僕も百姓をしながらだったから、会社そのものに金銭的には余裕はなかったけど、何かこう、心の上で従業員も丸く。

伊庭 ゆとりがあった。

松本 でも、私は町の人間だから、収入は江若だけしかなかったよ。

伊庭 それはしんどいな。

上田 あの地元の人と駅との関係。気楽に駅へ入ってきて話をされていたでしょう。

▽それは世間話をしに来るんですか。
上田 しょうもない世間話。われわれが暇なときに、駅にふいと行くと、駅長さんも

↓廃線当日の近江木戸駅（昭和44年 松本章一氏蔵）



仕事はちゃんとしながら、地元の人も交えて気安にしていましたよね。

伊庭 在所の祭の日には、駅にごちそうを持ってきてくれましたよね、あの時分。

上田 いまの時代では考えられないけどね。伊庭 荷物を送りに来たりした人が、心安くされて。

▽本日は長時間ありがとうございました。（2012年8月23日、大津市市民文化会館会議室にて）

江若鉄道の思い出募集

江若鉄道とその駅周辺にまつわるエピソードを募集します。いつ頃、どの駅での出来事かを200字程度にまとめてください。

お寄せいただいた内容は、2013年3月発売予定の木津勝・山本晃子著『(仮)江若鉄道の思い出』（サンライズ出版刊）で一部を紹介させていただきます。

■応募方法 お名前(匿名可)、ご住所、ご連絡先(電話番号もしくはEメールアドレス)と、思い出をご記入のうえ、下記までおはがき、ファックス、電子メールでお送りください。

サンライズ出版「Duet」編集部

〒522-0004 彦根市鳥居本町655-1

FAX 0749(23)7720

e-mail: info@sunrise-pub.co.jp

江若鉄道沿線名勝案内

高島市教育委員会事務局文化財課
山本晃子

大正10年(1921)3月15日、大津市内の三井寺下(みいでらした)観山間で営業を開始した江若鉄道は、その名が示すとおり、近江(おみ)と若狭(わかさ)をつなぐ鉄道となることを目指して、路線を徐々に北へ延ばしていった。沿線住民から株主を募り、資金繰りをしながらの工事ではあったが、大正12年4月には叡山(えいざん)・雄琴(おとこ)間、12月には雄琴(おとこ)・堅田(かた)間、13年4月には堅田(かた)・和邇(わに)間、15年4月には和邇(わに)・近江木戸(おみきど)間、8月には近江木戸(おみきど)・雄松(おまつ)間、昭和2年4月には雄松(おまつ)・北小松(きたこまつ)間、12月には北小松(きたこまつ)・大溝(おほまど)間、昭和4年6月には大溝(おほまど)・安曇(あづみ)間、そして昭和6年1月には安曇(あづみ)・近江今津(おみいまつ)間と延伸し、新しく駅が開業するたび、その周辺では、地

元住民らによ

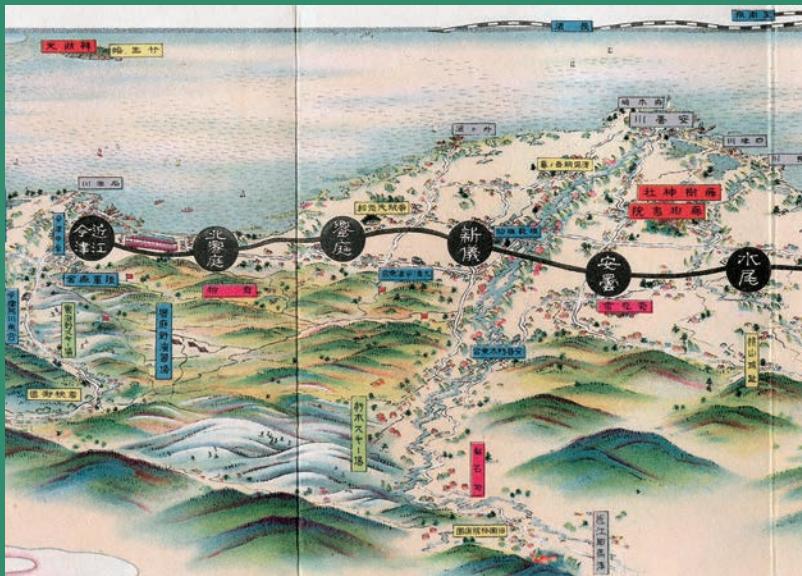
る開通祝賀行事が繰り広げられた。湖西地方に初めて走る鉄道を、地域住民が大きな期待と喜びで迎え入れたことは想像に難くない。そうした沿線住民の歓迎ムードにあわ

せて、会社側が力を入れたのが観光を目的とした乗客の増加をはかることで、そのため沿線の史跡や名勝を紹介する数種類のパンフレットが作られた。滋賀県一円には言うまでもなく多くの風光明媚な名勝地等があるが、鉄道の通っていないなかった湖西地方のそれは、これまで他地域にくらべて紹介されることも少なかつたであろう。

江若鉄道株式会社が作成した沿線名勝案内パンフレットは、カラー刷りの鳥瞰図的な地図に路線と駅名をおとし、裏面には史跡・名勝の案内文章が記されたものである。同様の形式のものが、路線の延長のたびに発行されたようで、発行年の古いものから順に見比べてみると、路線が延伸されていった様子がよくわかる。

今回紹介しているものは、昭和12年の省営バス(国営バス)若江線(わかえせん)の開通を記念して江若鉄道が発行した沿線名勝案内で、すでに鉄道の全線は開通している時期のものである。パンフレットには江若鉄道の路線だけでなく、乗り継ぎのできる京阪・国鉄線、さらに福井県を含めた地図が掲載されており、このときに近江今津駅から小浜までのバス路線が開通したことにより、近江と若狭をつなぐ江若鉄道の当初の計画が実現したと考えられたことがわかる。

沿線の名勝としては、大正末に創設された安曇駅近くの藤樹神社や、昭和初期に賑わった近江今津駅近くの饗庭野スキー場などが紹介されており、この時期の町の様相を伝える貴重な資料にもなっている。



▲「江若鉄道沿線名勝案内」
(部分、高島市蔵)



特別展 湖北の観音

〔長浜会場〕信仰文化の底流をさぐる

開催中～10月14日(日)

長浜市長浜城歴史博物館

〔休館日〕会期中無休

〔入館料〕一般400円、小・中学生200円

〔お問い合わせ先〕TEL0749(63)4611

〔高月会場〕観音の里のホトケたち

開催中～10月21日(日)

高月観音の里歴史民俗資料館

〔休館日〕月・火曜日、祝日の翌日

〔入館料〕高校生以上300円、小中学生150円

〔お問い合わせ先〕TEL0749(85)2273

〔観音の里〕と称される旧伊香郡地域の十一面観音、聖観音、千手観音、馬頭観音など、バラエティーに富んだ観音像を公開。

秋季特別展 織田信長と武田信玄

戦国のうねりの中で―

10月6日(土)～11月11日(日)

滋賀県立安土城考古博物館

織田信長と武田信玄の統治のあり方や天下への考え方を比較します。

〔休館日〕月曜日 〔入館料〕大人860円、

高大生610円、小人400円

秋季特別展講座

〔会場〕セミナールーム 〔定員〕140名

〔元龜争乱と近江の城〕

10月14日(日) 午後1時30分～3時

〔講師〕下高大輔氏(彦根市教育委員会主任)

〔信長・信玄徹底比較〕

11月4日(日) 午後1時30分～3時

〔講師〕高木叙子氏(安土城考古博物館主任)

〔お問い合わせ先〕TEL0748(46)2424

秋季特別展 オブションナル・クルーズ

琵琶湖からお城を眺望する湖城遊覧クルーズ

10月21日(日) 午前9時集合

〔集合場所〕大津港 〔定員〕60名

〔案内〕大沼芳幸氏(安土城考古博物館副館長)

〔参加料〕4500円(昼食代含む) 要予約

〔お申込み先〕琵琶湖汽船

TEL077(524)5000

企画展 阿弥陀さま―極楽浄土への誓い―

10月13日(土)～11月25日(日)

大津市歴史博物館

阿弥陀仏の浄土信仰を広めた法然上人没後800年と親鸞聖人没後750年を記念し、さまざまな阿弥陀如来像の姿や新発見を含む多数の関連寺宝を公開。

〔休館日〕月曜日 〔観覧料〕一般1000円、

高校・大学生500円、小中学生無料

〔お問い合わせ先〕大津市歴史博物館

TEL077(521)2100

史料館で近江商人たちと出会う

10月15日(月)～11月22日(木)

滋賀大学経済学部附属史料館

代表的な近江商人たち8人(日野の中井源左衛門、八幡の西川伝右衛門、五個荘の川島宗兵衛、高宮の前川善三郎・馬場利左衛門・不破弥三郎、豊郷の伊藤長兵衛・伊藤忠兵衛)の活動を示す史料を展示します。

〔休館日〕土・日・祝日(11月3・4・11日は開館)

〔観覧料〕無料

企画展関連講演会

〔近江商人研究の今昔〕

11月10日(土) 午後1時30分～4時

〔会場〕滋賀大学経済学部講堂

〔講師〕宇佐美英機氏

〔お問い合わせ先〕TEL0749(27)1046

(滋賀大学経済学部附属史料館館長)

公益財団法人滋賀県緑化推進会 主催

巨木・名木保全(治療)研修会

11月7日(水) 午前10時～午後3時

平成21年度よりスタートした「淡海の巨木・名木次世代継承事業」により、「信長馬繫ぎの松」や「唐川の本杉」など13本の巨木・名木の治療が完了しました。その一環として、東アジア老樹研究の第一人者、李春子先生と滋賀県の巨木・名木治療の第一人者、北村正隆樹木医による講演と現地説明を行います。

午前―講演「東アジアの老樹文化と保全について
―日・台・韓の現地調査と調査結果に基づいて―」

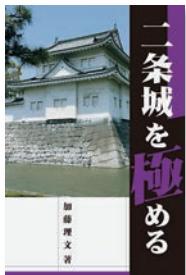
講師 李春子氏(関西大学・神戸女子大学講師)
会場 滋賀県森林センター(野洲市北桜978-95 TEL 077-587-2655)

午後―現地説明「大木・老木の治療のポイントについて」

講師 北村正隆氏(樹木医)
場所 近江富士花緑公園内植物園(森林センター横)
参加費 無料(昼食・お茶などは各自用意してください。)
定員 50名
その他 午後の植物園へは徒歩で行きます。歩きやすい服装でお越しください。

お申込み方法 「巨木・名木保全研修会参加希望」の文字とお名前(グループの場合は全員)、所属団体、お電話番号を明記のうえ、下記までファックスにてお申し込みください。
(公財)滋賀県緑化推進会 担当:田上 FAX 077(516)7858

締切 10月末日



二条城を極める

加藤理文 著

小B6判並製本 総64頁 定価840円

書店にて発売中

彦根城、熊本城、大坂城に続く「名城を極める」シリーズ第4弾は、大坂の陣で徳川幕府の本営となった二条城。東大手門、隅櫓、天守台など、いまも残る遺構の数々をガイド。



あったかいね、永遠の学び舎

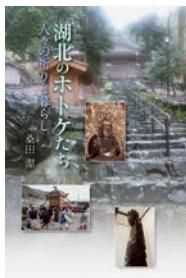
豊郷小学校物語

上坂和美 著

A5判並製本 総128頁 定価1260円

書店にて発売中

完成から75年。実業家古川鉄治郎が故郷に寄付した小学校が、幾多の試練を経て建設当時の姿をよみがえらせるまでをたどった、挿し絵入り児童向け読み物。



湖北のホトケたち

人々の祈りと暮らし

桑田 潔 著

A5判並製本 総168頁 定価1890円

書店にて発売中

毎日新聞滋賀版好評連載を単行本化。近江には無住の寺になぜ多くの仏像が守られているのだろうか。湖北を舞台に伝説も含め、暮らしに息づく人々の営みと祈りをたどる。



第4回びわ湖検定 問題と解答

びわ湖検定実行委員会 編

A5判並製本 総88頁 定価630円

書店にて発売中

今年1月29日に実施された第4回びわ湖検定試験1級から3級の問題と解答集。第5回びわ湖検定試験は、12月2日(日)に4会場で実施。

受付締切：10月15日(月) お問い合わせ先：びわ湖検定実行委員会事務局 TEL.077(522)9258



浄土宗 西照院のお話

—その歴史といま—

横井邦彦 著

A5判並製本 総146頁 非売品

お問い合わせ先 蒲生郡日野町下駒月1059(著者)

日野町の南端、甲賀市と接する下駒月にある西照院。現住職の著者が、寺に伝わる記録などをもとに、開山の経緯をはじめ、仏画や梵鐘など什物の来歴と年中行事を紹介。(2012.4.1刊)



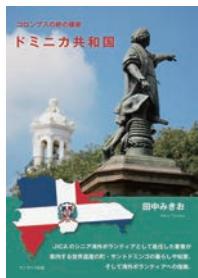
戦後とともに歩んだ 教員人生五十年

遠藤繁雄 著

A5判上製本 総264頁 非売品

お問い合わせ先 守山市吉身2丁目9-52(著者)

終戦の年9月に辞令を受けて始まった教員人生。数学教育とバレーボール部指導に熱中したかけだし時代、人事主事として苦学労働の絶えなかった県教育委員会時代などを振り返る。(2012.3.20刊)



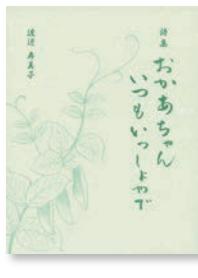
コロンブスの終の棲家 ドミニカ共和国

田中みきお 著

A5判並製本 総124頁 定価1365円

書店にて発売中

JICAのシニア海外ボランティアとして赴任した著者が案内する世界遺産の町・サントドミンゴの暮らしや知恵。海外ボランティアに関心のある方へのガイド的内容も。(2012.5.17刊)



歌集 おかあちゃん

いつもいっしょやで

渡辺寿美子 著

A5変形並製本 総116頁 非売品

お問い合わせ先 犬上郡豊郷町沢293(著者)

夜中に 母と私が顔合わせると／決まって拾まる酒盛り(中略)父や兄には内緒の／女だけの世界(後略)―「酒盛り」。母の一周忌を迎えるにあたり、50篇をまとめた詩集。(2012.6.13刊)

おうみ 淡海文庫48

長浜曳山まつりの舞台裏

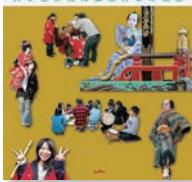
—大学生が見た伝統行事の現在—

滋賀県立大学曳山まつり調査チーム 著
B 6判並製本 総216頁 定価1260円

書店にて発売中

子ども歌舞伎やシャギリはどのように伝承されているのか。山組の住民や関係者以外にはうかがい知ることのできない現場を、滋賀県立大生が調査、本番までの知られざる舞台裏をレポート。

長浜曳山まつりの舞台裏



近江絹糸「人権争議」はなぜ起きたか



近江絹糸「人権争議」はなぜ起きたか

—五年間の彦根工場潜行活動を経て—
朝倉克己 著

四六判並製本 総184頁 定価1680円

書店にて発売中

労働環境改善と労働者の人権を求め、10代の若者たちがストに突入した近江絹糸争議。彦根工場でスト決起のリーダーとして活動した著者が、争議に至るまでの日々を克明に振り返る。

湖猫、波を奔る

弟子吉治郎 著

四六判上製本 総336頁 定価1680円

書店にて発売中

琵琶湖の神の島に棲み着いた黒猫、篠笛を奏でる少女、穴に魅せられた少年、丸子船を操る父娘……時は満ち、彼らが一堂に会したその日、島に異変が！ 滋賀を舞台に描く傑作エンターテインメント登場。



湖北の観音

—信仰文化の底流をさぐる—

長浜市長浜城歴史博物館・高月観音の里歴史民俗資料館 編

B 5判並製本 総166頁 定価1890円

書店にて発売中

飛鳥・奈良時代以降、それぞれの時代ごとに代表的な湖北の観音像を紹介し、観音信仰がどうやって地域に根付いてきたのかを考察。仏像全方面のカラー写真を掲載。



琵琶湖の船が結ぶ絆

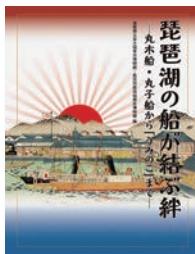
—丸木船、丸子船から「うみのこ」まで—

滋賀県立安土城考古博物館・長浜市長浜城歴史博物館 編

B 5変形並製本 総144頁 定価1575円

書店にて発売中

琵琶湖舟運の歴史と琵琶湖の船の変遷を多角的に検証すると同時に北陸・中部と京阪神を結ぶ交通の起点として繁栄した長浜をはじめとする湖周の湊の姿を紹介。



三重の山城ベスト50を歩く

福井健二・竹田憲治・中井均 編著

A 5判並製本 総296頁 定価2100円

書店にて発売中

伊勢には国司であった北畠氏や北畠庶流の城郭、近江や大和との国境である伊賀には数多くの中世城館が築かれるなど、三重県旧4国も中世城館の宝庫である。平城17城を含め、概要図、アクセス図付きで紹介。



表紙写真

江若鉄道 白鬚—高島町間 (昭和44年)

撮影：福田誠二氏

現在のJR湖西線近江高島駅の南に位置する乙女が池のほとりを走る江若の様子。打下集落(高島市勝野打下)の向こうには、琵琶湖が広がっている。現在、廃線跡は道路として利用されている。写真では、気動車と付随車(客車)の2両で運行しているが、実際にはラッシュなどの時間帯にあわせて気動車による三重連を行なうなど、適宜編成を変えたそうだ。いずれにせよ、廃線間際の江若鉄道の日常の風景をとらえた写真だといえる。

Duetの定期購読をご希望の方は、下記までお申し込みください。

お申し込み先

〒522-0004

滋賀県彦根市鳥居本町655-1

サンライズ出版株式会社

Duet 編集部

TEL (0749) 22-0627

FAX (0749) 23-7720

(替替) 01080-9-61946

インターネットでDuetがお楽しみいただけます。

<http://www.sunrise-pub.co.jp/>

廃線の前年、湖北に生まれた私には、江若鉄道にまつわる思い出がまったくないので、平成18年に大津市歴史博物館で開催された企画展「ありし日の江若鉄道」に寄せられた思い出の文章(博物館HP「学芸員のノートから」で公開中)から一つ転載させていただき、後記にかえます。

盆、正月は父の故郷の朽木です。おすずが為に浜大津より江若鉄道に乗った思い出があります。階段のある浜大津駅で「りぼん」や「なかよし」を買ってもらい安曇川まで長い列車の旅でした。琵琶湖ざりざりを走る時は寝ていても「白ひげさんや」と起こされたように思います。(大津市在住 女性) ㊦